平成２８年３月３１日（木）

老球の細道２２４

３月の言葉

会津バスケットボール協会　　室　井　冨　仁

退職して２年が経過した。２年前の３月は将来に希望が持てない不安の日々であった。今年度はたくさんのクリニック、講習会に加え大学の授業も加わり、準備不安で夢にまでうなされる日々が続いた。が、やることがあるのは幸いである。３月は別れの月。別れは出会いの始まり。人生、山あり谷あり、バスケットあり。良き終わりは良きスタートなり。

１・読書から

◆「健全な劣等感とは、理想の自分との比較の中で生まれるものであり、健全な優越性の追求とは、自分にとってのマイナスからプラスを目指して努力することです」〈岸見一郎著『人生の意味の心理学アドラー』〉

私自身、劣等感によって自分を鼓舞してきたが、他人との比較の間違ったものだった。もっと早くアドラーに出会っていたら。陸上の室伏広治は恩師から「室伏君。君の競争相手はライバルでも記録でもない。無限大の蒼空、確固不動の大地だ」と言われていた。

◆「大久保は最善を得ざれば次善、次善を得ざればその次善と、できる程度において、出来うることをなす男である」〈城山三郎著『歴史にみる実力者の条件』〉

西郷隆盛が天下有事の時だけとんでくる男であるのに対して、大久保利通は、火事の有無にかかわらず、毎晩決まった時間に回ってくる自身番のような男であったという。西郷ばかりに注目していたが、本物の実力者は大久保のように地味な人間なのかもしれない。

◆「気分よくスポーツをする大きな条件、誰もがみんなと同じ程度にうまくなること」〈中村敏雄『スポーツとは何か』〉

ミニバスケットボールを指導しているとこの言葉が身に染みてくる。笑顔で元気にコートにやってくる子どもたちを上手にすることは指導者の責任である。

◆「理論とは、すなわち実践に意味を与えてくれるもの。実戦なき理論はむなしく（空論）、理論なき実践は危うい」〈日本体育協会『スポーツジャパン』２０１６〉

スポーツの練習は「わかった（理論）」と「できた（実践）」の両立である。特に指導者は理論を持たないとハイレベルの選手には対応できない。勉強がきついと感じるなら指導者になるのはやめよう。そうでないと選手に失礼だ。

２・新聞等のコラムから

◆「悟りという事は如何なる場合にも平気で生きて居ることであった（正岡子規）」〈朝日新聞・折々の言葉〉

正岡子規の悟りとは生をひたすら愛でることであった。結核を患い、激痛にのたうちまわるなかで死の直前まで床で絵を描いたり、料理や社会情勢・教育を論じたという。いざとなっても自分を見失わない生き方ができるだろうか？

◆「雨乞いの話をご存知でしょうか。ある村に、その人が祈れば必ず雨が降るという雨乞いの達人がいました。どうしてかと達人に聞いたところ、秘訣はただ一つ。雨が降るまで祈るのだ。途中でやめるからいけない。雨は必ず降ると答えた」〈ひらほく新聞〉

４７年前バスケットボールで会津地区各中学校のキャプテン、エース級が２０人以上会津高校に入学した。最後まで残ったのは２人。そのうちの一人が最も下手だった私。